
マイナスに愛を、過負荷に幸せを

舌普化愛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マイナスに愛を、過負荷に幸せを

【Nコード】

N6951V

【作者名】

舌普及愛

【あらすじ】

朝起きたら体が縮んでました。

あれ、死んだはずの両親が生きてる？ しかもちよろつと立ち読みする程度だった漫画のキャラが居る？ え、もしかしてトリップしてしまいましたか？

こんな主人公がああ過負荷の女の子を愛して幸せにしようとするお話です。

とりあえずまあ、設定？

主人公

平賀 ヒラガ 箱 ハコ

実年齢18歳

トリップ時年齢3歳

黒髪黒目、普通の女の子、ただ全身包帯と絆創膏と傷だらけ

めだかボックスはちよろつと立ち読みしていた程度の知識。しかし飛沫のおっぱいの偉大さだけは覚えていた

飛沫ちゃん大好き。飛沫ちゃんのためなら全身傷だらけでも気にしない。寧ろ嬉しいがる、愛です愛。でもMじゃないんだなあ

B型 ノーマル、異常性・過負荷共になし。だが一定量のストレスを超えるとみーまーのまーちゃん化する

1 転生しました（前書き）

何分拙い文ですが見て行ってくれると嬉しいです。

1 転生しました

朝起きたら身体が縮んでました。

「え、なんで？」

飛び起きて状況を確認。……把握。どうやら私はタイプスリップをしてしまったらしい。なんでわかったかって？ そりゃあ、中学の時死んだ筈の両親が笑顔で部屋に入ってきたからですよ。

「あら、箱ちゃん起きたの？」

「今日は一人で起きたのか。えらいぞ」

父親にわしわしと頭を撫でられて抱き上げられる。あー、何か懐かしいこの感触。不覚にも涙が浮かんできて少し困った。抱きついて押さえていると両親、何処かへ移動しているらしい。

黙ってしがみついていたら身体がふわっと浮いて椅子に座らされた。目の前には朝食。懐かしい、忘れることのないお母さんの作ったご飯だ。

「さ、箱ちゃん食べましょうね」

「じゃあ箱、お父さんは仕事に行ってくるからな」

「うん、いつてらっしゃいおとーさん」

舌つ足らずな私の返事に満足したのか、お父さんは私の頭を撫でてお母さんにキスをしてから出かけて行った。そういえばこの両親、万年鴛鴦夫婦だったっけ？

そんなことを思いながらご飯を一心不乱に食べる。ああ、懐かしい。この味だよこの味。

「おかーさん、おいしい」

「ふふ、一杯食べて良いのよ」

「うん」

にこにこ微笑ましそうに私を見るお母さん。嗚呼、この人たちが中学校入学した私の初めての誕生日で死ぬなんて考えたくないなあ。嫌だなあ。

「どうしたの？ 箱ちゃん、怖い夢でも見たの？」

「んーん、なんでもない」

お母さんに笑顔で返事をし、どうにか未来を変えれないかと考える。もし両親が死んでしまうのが決定事項だったならば変えることは出来ないけれど、前と違う選択肢を選べば変えることが出来るかもしれない。

そこまで考えた所でお母さんがあつと声を出した。

「どうしたの？」

「そういえば今日お隣さんが引っ越してくるんだったわ。箱ちゃんと同じ年の女の子も居るって言うてたから仲良くなれると良いわね」
「うん！」

あれ、おかしい。前と違う。前は隣には老夫婦が住んでいて、一杯可愛がつてくれていた筈だ。引っ越しなんて知らない。……ま、良いか。考えるだけ無駄だ。

「ごちそーさまでした」

「はい。お粗末さまでした」

お母さんがにこにこしながら食器を片づける。さて、腹ごなしも済んだし。お母さんの手伝いでもしようか。

「おかーさん、わたしもおてつだいするー」

「あらあら、箱ちゃんお手伝いしてくれるの？　じゃあお願いしようかな？　もー、箱ちゃんったら3歳なのにお手伝いしてくれるなんて本当に良い子ね」

「わたしいいこー？」

「ええ、すつごく良い子よ」

お母さんの会話から一つの情報をキャッチ。どうやら私はまだ3歳児らしい。いやあ、15歳も若返ったわ。

その後、お母さんが洗った皿を拭いたり掃除を手伝ったりしていたらあつという間に時間が経った。

良い仕事したと搔いてもいない汗を拭きながらお昼寝の為にくまちゃんを取りに行くと、お母さんがばたばたと走ってきてくまちゃんごと私を抱き上げる。

「箱ちゃん！　お隣さんが来たわよ！」

「おんなのこいる？」

「ええ、会いに行きましょうね」

これが私と彼女の運命の出会いだった。

2 隣の女の子

隣の家の前にトラックが沢山停まっでいて、お母さんは越してきた人と笑いながらお話している。お隣さんは志布志さんと言うらしい。どこかで聞いたことのある名字だ。

で、私はと言いますとその私と同じ年らしい傷だらけの女の子の傷を撫でています。

「はこ、いいって」

「だあめ！ しぶきちゃんはかわいいんだからきずだらけなのはだめなの！」

と、ここでどうしてこうなったか説明。

ファーストコンタクト↓何この可愛い生き物おおおお！！↓あれ、何か見たことあるぞこの子↓あ、めだかボックスの飛沫ちゃんだ↓原作通り傷だらけ……とか許すかあああああ！！↓飛沫ちゃんの柔肌は私を守る！

こんな感じ。

ぶつちやけ惚れました。ええ、精神年齢何歳だと言いたいんですね18歳です。わかってます、年齢の差が半端無いってことは。しかし今の私は3歳児。全然良いじゃない。あ、好きと言ってもアレですよ？ 庇護対象として惚れたっただけです。別に恋愛対象として見ていませんから、そこそこ間違いない。

「これからしぶきちゃんはいぶんをきずつけちゃだめだよ？ そのかわりわたしがけがしてあげるから」

「……なんで？」

「ん？」

「なんでそんなこというんだ？」

「だってしぶきちゃんがすきだから！ わたしはしぶきちゃんをせかいでいちばんしあわせにしてみせる！」

心底不思議そうな顔をして私を見る飛沫ちゃんに即答した。考えるまでもないよ。私はこの子を、飛沫ちゃんを世界で一番幸せにしてみせる。過負荷でもマイナスでも不幸でも絶対の絶対の幸せにしてみせる。

傷を撫でながらじつと飛沫ちゃんを見ていると、唐突に、ぼたっと彼女の瞳から涙が落ちた。

「！？」

「あたし…、そんなこといわれたことない。いつもきもちわるいつてなぐられる。おまえなんかしあわせになれないっていわれる。…

…はこ、あたしはしあわせになれる？」

「なれるよ！ だってわたしがいつでもいっしょにいるもん。しぶきちゃんのかわりにけがをして、しぶきちゃんをまもってあげるよ」

「ほんとう？ ほんとうのほんとう？ ぜったい？ ぜったいにいっしょにいてくれる？」

「うん、もちろん！ だからしぶきちゃんも、ふこつでもしあわせにならなきゃだめだよ？」

「……ふこつなのにしあわせてなに？」

「それはおいおいわかっていくからだいじょうぶ！ さ、いまからこうえんにいこう？ しぶきちゃんのかわりにかさぶたいーっぱいつくってあげるから」

「……うん。ありがとう、はこ」

こうして私は飛沫ちゃんの隣にいたことになった。

後悔？ あはは、それを聞くことすら不幸しあわせだね。

3 幼稚園と飛沫ちゃん

鏡に映る私は傷だらけで、それ以上に包帯と絆創膏まみれだ。

どうも平賀 箱です。あれから2年が経って私達も5歳になりました。え、時間の進みが早いって？ いやだって、別段特別書くようなことは何もなく。おんなじ毎日の繰り返しでしたよ？

具体的に言っと、飛沫ちゃんの代わりに怪我をして、飛沫ちゃんの代わりに血を流して、飛沫ちゃんのように親に殴られなかったのかって？ ええ、家の親は全然気にしませんでしたよ？ それどころか「元気に外で遊んでたら怪我くらい当たり前だ。もっと傷だらけになるくらい遊びなさい」って言われました。うん、私の両親は昔から変わっている。んー、あと変わったことは……あ、飛沫ちゃんの両親が殆ど家に帰って来ない状態になっているので飛沫ちゃんは家で預かっています。毎日朝から晩まで飛沫ちゃん塗れ。私は非常に満足です。

「箱！ 幼稚園行くぞ！」

「飛沫ちゃんちよつと待って！」

階下から飛沫ちゃんの私を呼ぶ声がする。私は最後に額にぺたりと絆創膏を貼り付けた。これで大丈夫、私の傷は飛沫ちゃん以外に見えない。

階段を急いで降りると飛沫ちゃんが私に抱きついて、その後どこにも傷が出ている所が無いが確かめた。

此処2年で分かったことだが、どうやら飛沫ちゃんは私の傷を誰にも見せたくないようだ。最初の頃、絆創膏と包帯を巻かずに外に出たら飛沫ちゃんは凄く怒って泣いた。曰く「はこのきずはあたしだ

けのものだ」いや、別に良いよ。それで飛沫ちゃんが満足できるなら全然良いよ。オールオツケイさ。

そんな私達をお母さんは微笑ましそうに見てから飛沫ちゃんに確認した。

「飛沫ちゃんバッド持った？」

「持った！ 箱も持った！ お弁当も持った！ 忘れ物ない！」

「箱ちゃんは？」

「ない」

「じゃあいつてらっしやい」

「「いつてきまーす」」

あ、そうそう。飛沫ちゃんはおぼろげな記憶の中の原作通り少年野球団に参加しました。本当はさせたくなかったけどどうしてもしないと飛沫ちゃんが言ったので。多分私の傷だけでは満足できなくなつたんだなあと踏んでいますが本当の所は分からないんだなあ。

まあ、今のところ大きい傷は作っていないので良しとしていますが、もし大怪我なんてしようものならばき倒したいと思っているなんて誰にも言えない！

そんなことを思いながら飛沫ちゃんの話に耳を傾ける。どうやら野球団で起こっている不思議な事を語っているようだ。

「なんかさー、あたしの所属してるチームの人間がやけに怪我してんだよ。しかも怪我の治りが異様に遅くて、どんどん悪くなってるんだけど。これってもしかしてあたしのせいかな？」

「……どうして？」

「いや、何となく何だけどそんな気がして。箱はどうだと思っ？」

あー、飛沫ちゃん。私が色々頑張ったにも関わらず過負荷を発現しちゃった感じですか……。いや、別に良いけど……。にしては私の傷、

広がったり治りが遅かったりしないのね。これだけ少し原作と違う気がしなくもない。うーん、ここはやっぱり病院へ連れて行った方が良いのかな？

「んー、飛沫ちゃんのせいだとは思わないけど気になるんだったら病院へ行ってみる？」

「病院？ ……別に病気じゃないと思うんだけど。 ……まあ、箱と一緒に来てくれるなら行ってもいいよ」

笑顔で頷く飛沫ちゃんにノックアウトされそうになりながら笑い返し、私達は無事に、何事もなく、平穩に保育園に到着した。途中で飛沫ちゃんが釘バットを使って襲ってきた野良犬や崩れてきた壁をぶち壊していたけど、まあこんなのはいつも通り。寧ろ私の事を守ってくれているのだから文句なんて出る筈もない。

「じゃあ飛沫ちゃん。明日は野球も幼稚園もお休みだから一緒に病院行こうね」

「おう！ 約束だからな。忘れちゃダメだぞ！」

そういつて飛沫ちゃんはぱたと私から離れて行った。いや、組が別なのよ。私はさくら組、飛沫ちゃんはばら組。といっても私は精神年齢20歳だから周りの幼稚園児と遊ぶことなんてしない。耐えられる訳ないだろ！ ってなわけでいつも通りさくら組からこっそり抜け出して影から飛沫ちゃんを眺める。ストーカー？ いえいえ、愛故の行動だから大丈夫。それに飛沫ちゃんも私が見てると分かる嬉しそうな顔するし。うん、とても良い関係だ。

「お前気持ち悪いんだよ！ いつもバット持ってるなんて変だ！」
「こっちくん。あっち行け！」

いつものように石を投げつけられる飛沫ちゃん。……あの糞餓鬼飛沫ちゃんに傷つけやがって。どうやって報復してやるうか……。あ、飛沫ちゃんがキレた。よし、良いぞ！ 飛沫ちゃんやっちまえ！ ばったばったと持っている釘バットで周りの保育園児を薙ぎ倒していく飛沫ちゃん。やられたら十倍で返せって教えたのは勿論私ですが何か？

「飛沫ちゃん」

「あ、……箱」

全員が地に落ちて飛沫ちゃんが呼吸を落ち着かせている所にひよこつと出ていくと思った通り笑顔で私を迎えてくれる飛沫ちゃん。まったく、こんな良い子を寄ってたかってリンチするなんて近頃の幼稚園児は一体どんな思考回路してるんだ。

石を投げられて付いた傷を撫でると飛沫ちゃんは撥ったそうに笑う。それがどうしようもないくらい嬉しくて、幸せで、私は一生飛沫ちゃんの隣に居ようともう何度目か分からないけど決意した。

「お弁当食べようよ飛沫ちゃん。私、お腹空いちゃった」

「そうだな。じゃあ今日は中庭で食べよーぜ」

「さんせーい！」

とりあえず私は傷だらけになった園児たちを先生方に知らせてから中庭に行こうかな？ そんなことを考えながら飛沫ちゃんと別れて教室へ戻った私を待ち受けていたのは、いつものように恐怖に怯えた目だった。

あくまで私は普通なのに变なの。

3 幼稚園と飛沫ちゃん（後書き）

どんどん能力を発現していく飛沫ちゃんに、どんどん周りからズレていく主人公。

これで良いんだろうかと思う今日この頃（笑）

4 過負荷の崩壊（前書き）

蛾々丸ちゃんのキャラが行方不明なのは仕様です。すみません嘘です。

私が必死で少ないボギャブラリーの中から返答を探していると、男の子は興味が失せたのかゲームへ視線を戻す。

あ、ああー。ゲーム見たいなー、なんちゃって？

暫くその場でじっとしていたけれどやはりゲームの誘惑には勝てず、私はうろつろつと男の子の周りを歩きだす。見たいなー、見たいなー、見たいなー。無言で圧力をかけていると男の子は迷惑そうな顔を隠しもせず私をもう一度見る。勝機は私に有り！ すかさず笑顔を浮かべて一言。

「見ても良い？」

「……………」

呆れたように口をぽかんと開けている男の子に、お姉さん無言は肯定と受け取るよ？ 良いの？ そんな感情を笑顔に籠めてみる。すると男の子は観念したのか一つ溜息を吐いて、一つ左にずれた。よし、勝った。

椅子に攀じ登って男の子に密着。ふふふ、飛沫ちゃんとはまた違う子供体温が堪りませんなあ。あ、私変態じゃないよ？ なんかこの男の子からは飛沫ちゃんと同じ匂いがするからちよつとふらふらつとなってるだけだから。そこ勘違いしないように。

「ねえ、君何て名前？」

「蝶ヶ崎蛾々丸と申します」

「へー、私はね平賀 箱って言うんだ。よろしく蛾々丸ちゃん！」

ゲームの画面に視線を釘付けにして「ほほお」とか「あ、あああ……………」とかリアクションを取っていると蛾々丸ちゃんが少し笑った。ぐるつと首を回して蛾々丸ちゃんの顔を凝視するとぷいっつと視線が逸らされる。え、何だよ。

「蠅々丸ちゃん、何でそっぽ向くの？ 私蠅々丸ちゃんの笑った顔見たいのにー」

ぷくつと頬を膨らませると蠅々丸ちゃんは私の顔を見て堪え切れな
い様に嘖きだした。

「んな！ 蠅々丸ちゃん酷い！ 人の顔見て笑ったらいけないんだ
よ！」

「だ、だって……平賀さんが……おも、面白すぎて……！」

ちよつとム力ついたのでばかばかと軽く叩くが、どこ吹く風で咳き
込みながら笑い続ける蠅々丸ちゃん。なんとも晴れやかな顔で笑う
から、これは、その……これ以上怒っちゃいけないんだろうか？

……あ、なんか思い出して来たぞ。この子は近い未来飛沫ちゃんに
頭を殴打される男の子ではないか？ 阻止するべ……ってあ、ああ
あああああ。

「箱」

飛沫ちゃんキター！！ 何と言うバッドなタイミング、流石飛沫ち
ゃんだね 後ろ手に持つてるバットどうするつもり、って愚問で
すよねえ。何て考えてる間にも飛沫ちゃんは無言で近づいて来て、
にこ、ととてもキュートな笑顔を見せ、釘バットを打ちおろした。

——ドガッ——

予想通り、蛾々丸ちゃんの頭に振り下ろされるバット。正座の姿勢のまま椅子から落ちる蛾々丸ちゃん。慌てて椅子から降りて蛾々丸ちゃんを覗きこむと飛沫ちゃんが私の身体を引っ張つて自分の身体の後ろに隠してしまつた。おかげで蛾々丸ちゃんが見えない。そして飛沫ちゃんは私が今まで聞いたこともないような声色で蛾々丸ちゃんに諭すように話し始めた。

「し、飛沫ちゃん……？」

「箱、大丈夫か？ なにもされてない？ 傷作られてない？」

「う、うん。私は大丈夫だけど……蛾々丸ちゃんがつあが!？」

信じられなくて目を見開いたまま飛沫ちゃんを見上げると、飛沫ち

「やんも自分が何をしたのか信じられないような顔で自分の持つバツトを見ていた。」

「しぶき、ちや……？」

「は、箱を傷つけた。傷つけちゃった。え、え……箱が傷ついて、
傷つけたのはあたしで……。？ ……い、いやあああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああああああ
あ！！！！！！！！！！！！！！！！！」

「飛沫ちゃん？ 飛沫ちゃん！！」

飛沫ちゃんは持っていたバットを投げ捨てて狂ったように身体全体で叫び始めた。私の声も聞こえてないみたいで必死に名前を呼んだけど反応が無い。そればかりか、今の衝撃で過負荷かふかが完全に目覚めたのか病院の壁が崩壊し始めた。と同時に私の身体から血が溢れ出る。えっと、飛沫ちゃんの過負荷スカーデッドで『致死武器』だったわけ……。もう記憶が曖昧で朦朧で……。

血塗れになる身体を動かして叫び続けている飛沫ちゃんに近づく。蛾々丸ちゃんはいつの間にか椅子に座って興味深そうに飛沫ちゃんを見ている。あの子本当に飛沫ちゃんと同じなんだな、ちよつと羨ましいかも。なんて考えてる暇なんてないわな。

痛みで頭が朦朧とするけど、そんなのは関係ない。私の心におっ立つ三本柱はなんだ！？ 勿論、

「『飛沫ちゃん・飛沫ちゃん・飛沫ちゃん』だ！」

根性で身体を動かし飛沫ちゃんを力の限り抱きしめる。その瞬間、耐えきれなくなったのだろう。病院が崩壊した。

辺りから聞こえてくる悲鳴、怒鳴り声、蛾々丸ちゃんの声と体温。少し視線を上げてみると蛾々丸ちゃんが笑っているのが見えた。

「平賀さんは私を見下しませんでしたし、一緒に居てとても楽しかった。そんな想い、初めてでしたから少々戸惑いはありますが、私は貴女と一緒に居たいです。勿論、その可愛らしいお嬢さんが許してくれるか不安ですが、私と『同じ』ですから大丈夫でしょう」

何を言っているか半分も理解出来なかったけれど、どうやら蛾々丸ちゃんは私達を助けてくれるみたいだ。それは嬉しい、だってこのままだと私は勿論の事飛沫ちゃんまで死んじゃうからね。それは嫌

だ、それは困る。飛沫ちゃんを幸せにするまで飛沫ちゃんは死んじやいけない。私が死んでも飛沫ちゃんだけは死んじや駄目なんだ。病院がすっかり崩れ去った後、ようやく落ち着いた飛沫ちゃんの耳元で言葉を囁く。

「飛沫ちゃん、私は大丈夫だからね。全然痛くないよ、どおつてことないよ、飛沫ちゃんにつけられる傷なら全然痛くないよ、飛沫ちゃんの為なら私、全然痛くないよ」

「うつ、うつうつうう…っ！ はこ、はこお…！」

背中を撫でると縋りつくように抱きつかれる。嗚呼、いつもの飛沫ちゃんに戻った。

嬉しくて、つい気を抜いてしまった私は飛沫ちゃんと蛾々丸ちゃんの体温を感じながら気を失うことになってしまった。

大好きな人が死ななかった。

あー！ 私ってすごい幸せ者だなあ！！

4 過負荷の崩壊（後書き）

この後の展開で少し悩み中です。

このまま入院生活を書くか、小学校まで一気に飛ぶか。

皆さんはどちらが良いと思われますか？ 意見をお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6951v/>

マイナスに愛を、過負荷に幸せを

2011年10月9日10時44分発行